

## 日食遠征日誌 (3)

柴田淑次

## ○二月十日 土曜日 雨

今日は終日、雨、曇天が三日続いて観測準備進捗せず。特に午前中、雨甚しく、レオール島へ渡れず、十時頃迄宿舎にとじこめらる。光のカバーに用ひる長さ4米の箱を一つ据付けた。

午後一時頃より、土人のカヌーの競走あり。小雨降りしきる中を、3隻づゝ組になつて、遠くリーフ迄漕いで行く。競走用カヌーは十人乗り又は十二人乗りの大型カヌーで椰子の葉でデコレーションがしてある。ピース島とロソツプ島の對抗競技には遺憾ながらロソツプ島は敗れた。

アインスタイン五米望遠鏡がかりの人々は、雨の中をレオール島へ行つた、時計のレイトを調節に。

## ○二月十一日 日曜日 曇雨模様

今日も雨。まだ腹工合が悪いのでビオゼニンを飲む。今日は残りの機械を据付けて日食準備をほぼ完了した。

午前九時、紀元節の祝賀式あり。早乙女博士、秋吉中佐、ロソツプ村長等の挨拶あり。紀元節唱歌「雲にそびゆる高千穂の」<sup>7</sup>と云ふ歌を久し振りで歌つた。式を終る五分前、スコール來り、皆んなズブヌレになつて宿舎へ飛んで歸る。

晝食は祝宴、酒一本、汁粉、赤飯。皆んなで乾杯する。

夜紀元節祝賀提灯行列あり。島民と隊員の有志が夫々提灯をふりまはして、小さいロソツプ島が湧き返へる程騒々しい。ロソツプ踊「クイシャツシヤ」踊を島民が踊つた。ロソツプ島が夜此んなに賑かなのは前古未嘗有の事だと島の老人が語つた。

五米望遠鏡がかりの人々は、今夜よりレオール島に泊り徹夜の由。

## ○二月十二日 月曜日 晴一時曇

今朝、明方より少し晴れ出したらしい。時々雲間より出る太陽を捉らへて、最後の focus-test, Plate-shift, 分光器の Adjustment をやる。コンバリソンは

日食がすんでから入れる事にした。五米望遠鏡の方は今日は finder の test.

午後四時頃宿舍へ歸り、一時間程晝寝した。

夜は曇り。日食時に於ける時計の読み方等を上田先生と相談する。今夜は京都隊の大部分の人はレオール島泊り。

明朝から一時間晴れて呉れば、私の方の準備はすっかり完了する。

#### ○二月十三日 火曜日 晴一時曇

午前六時起床、晴れて居る。早速レオール島へ渡つて、正午前迄に遂に完全に日食準備を完了した。もう天運を待つのみとなつた。五米望遠鏡の方は finder の最後の test を終つた。

午後はやつと呑氣になつたので、今日迄の宿望を果すため、ロソツブ島にて活躍する東京天文臺の機械を參觀に行く。窪川理學士は十一米のコロナグラフ。藤田理學士は赤道儀式にした望遠鏡で Flash spectrum と Corona-spectrum, Prism と Grating の二刀流であざやかなものだ。服部理學士は巨大なる Object prism で Flash spectrum, 中野理學士、と東京隊の名金工、小野、竹田兩氏は、20種天體寫眞レンズと、13種の Comet-Seeker で外部コロナの撮影を擔當されて居る由。早乙女博士は折柄御不在だつたので、機械は見せて戴けなかつた。福見先生を初め夫々擔當の方々に、詳しく機械を説明して戴いた。

愈々明日は日食。夜は早く床にはいつたが、丁度、試験をうける前夜の様な氣持がして結局眠つたのは十二時頃だつたらう。夜空には星が降る様。

#### ○二月十四日 水曜日 午前快晴 午後曇後雨 日食當日

五時前起床、五時朝飯。氣遣はれた今日の空、仰げば何たる幸ひぞ。一點の雲もなく水平線迄快晴。西空低く南十空星を見る。一同勇躍してレオール島へ。六時半太陽を入れる。

午前九時第一接觸が初まつた。荒木博士は 7種の望遠鏡を汀に据えて Contact の擔當。快晴の中に太陽がかけて行く。皆既前十五分、太陽の西數秒の所に金星を見た。午前十時數分、豫定より數秒おくれて皆既にはいつた。瞬間、私は分光器中の Spectrum をたよりに、Flash のシャッターを切つた。皆既前の四圍の景色は實に物すごくも恐しかつた。化物が出さうな氣がした。

強く印象に残つた。time-counter は千田理學士がつとめられた。皆既中に於いて私は Corona Spectrum を撮影中、テントを飛び出して約一分程充分に、黒い太陽を眺める事が出来た。コロナは所謂極小型で赤道の方向に太陽の直径の約三倍位延びて居た。色は銀白色、紅焰はそれらしいものを太陽の右肩に見た。四圍の暗さは満月の夜の明るさより遙かに明るい様な気がした。最後のシャッターを閉じてテントを飛び出した時幸ひ私は生光をも見る事が出来た。生光は全く美しい観物であつた。此の間、森山氏は私のよき time-keeper として終始された。又木下氏はシロスタットの光の一部を用ひて corona-graph を撮影された。皆既が終つて、一同五米望遠鏡の前に立ち萬歳三唱、記念撮影をした。空は快晴。第四接觸も無事観測出来た。全く、すばらしい快晴の中に、皆んな夫々豫定通りの仕事をしたのである。東京天文臺其他も成功の吉報を夫々内地へ打電した由。

午後になつて曇り出した。一時頃には雨さへ降つて來た。私はコンパリソン・スペクトルを入れた。午後からは遂に全く太陽が出なかつた。今回の日食は全く天佑である。

夜は久し振りでビールの乾杯をする。

#### ○二月十五日 木曜日 曇一時晴

早朝より荷造りにかかる。島民5人と森山氏とで夕方迄大體の荷造りを終る。俄かに疲れが出た。渡邊氏が氣分悪いとの事。

夕食事バ、イヤを食ふ。久し振りでうまかつた。

五米望遠鏡のかゝりの人々は、Test-plate を撮影するため今夜もレオル島へ行かれた。

#### ○二月十六日 金曜日 曇一時晴

今日は昨日の荷造りの残りをやる。私の分は正午迄にすつかり完了した。平榮丸に少し積込む。

午後は、寫眞藥品の荷造りを手傳ふ。

夜、土人の家へ出かけて土産物を買つた。いい物がなくて困つた。

#### ○二月十七日 土曜日 曇一時晴

朝どうしたわけか、腹が痛くて困つた。未だ先日來の腹痛が直ほりきらな

いらしい。氣晴らしにレオル島の奥地へ陸路探險を試みる。路のない所迄つき進む。奥地は椰子とパンとタコの木が密生し蠅と蚊が多い。寫眞を二、三枚とる。

午後、荷物の一部を平榮丸へ積込む。

夜、カヌーの小型模形が出来て来たが内地迄持つてかへるのが一寸骨なり。

#### ○二月十八日 日曜日 快晴

今日は終日よいお天氣。日曜なので仕事を休む。ロソツツ島も愈々明日限りになつたので午後より、ロソツツ島附近の島巡りをする。渡邊氏、上海の東中氏、森山氏の三人とボートに乗つて、オイテ島(ロソツツ島の北にあり)附近の島々を巡る。全部無人島也。16ミリの活動寫眞や寫眞掛を盛んに活躍さす。レオル島とオイテ島の中間の海の景色はまるで箱庭の様で全く美しい。半日呑氣に清遊した。

夜は土人の家で土産物を買集める。

#### ○二月十九日 月曜日 晴夜 スコ|ルあり

早朝レオル島へ行つて荷物の後始末。平榮丸に最後の荷積みをする。

愈々明日ロソツツ島とお別れするので夕刻島民との別れの挨拶あり。

観測隊を代表して早乙女博士の挨拶あり。

今夜は、平榮丸に泊る事にし、午後九時の定期モーターボートで平榮丸に乗込む。

#### ○二月二十日 火曜日 快晴

午前六時半より春日班の積荷あり。全隊員の積荷は午前七時過ぎ終了。一緒に碇泊して居た瑞鳳丸は午前七時出航。平榮丸は午前八時出航。島民の盛んな歡送裡にトラツク島(ロソツツ島の西北60哩)へ向ふ。鱈、飛び魚等を見た。午後四時トラツク夏島に碇泊六時すぎ、わざわざ私達を迎へて来てくれたなつかしき軍艦春日に乗込む。

内地よりの便りに初めて接して、皆んなむさぼる様に手紙を讀んで居た。

今夜は軍艦に寝た。

#### ○二月二十一日 水曜日 晴

午前七時より軍艦に積荷開始、十一時頃やつと終了。軍艦のランチにて夏

島に上陸する。夏島はロイツツブ島等に比し遙かに大きく、山あり谷あり、南洋廳のトラック支廳の所在地にして、邦人も澤山住んで居る。言葉には不自由しない。道路も完全である。

午後は、南洋支廳の歓迎會にのぞみ、トラック公學校の學藝會、宴遊會、島民の角力競技あり。島舉げての歡待を受ける。

夕刻、トラック病院長最上氏と大いに乾杯し、上弦の月が椰子の葉に落ちかゝる頃迄祝杯を舉げ、とうとう今夜は氏の家に御厄介になつた。

○二月二十二日 木曜日 晴

朝支廳下の廣場にて島民の踊りあり。北西離島の踊りが最も人目を引いた。夏島を歩きまわる。支廳よりトラック港の見晴しはすばらしい。象牙椰子の實、ステッキ等の土産物を買集める。

午後五時のランチにて軍艦に歸り、手荷物の整理をする。

○二月二十三日 金曜日 晴 (正午の艦の位置 N 7°46' E 151°49')

午前九時、愈々トラック島を出航、内地に向ふ。トラック官民多數の歡送あり。瑞鳳丸もトラック小學生を満載してリーフの近く迄送つてくれた。リーフを出ても、波靜かなり。氣持のよい航海。

午後二時半、運用長の「艦内生活」の話あり。

午後五時、ルクテ島を右舷に見て一路北上する。

○二月二十四日 土曜日 晴後曇 (正午の艦の位置 N 11°25' E 150°27.5)

軍艦に乗込んで居る練習生は、海深を測定する教練をやつて居た。

午後は操舵室見學。たよりない様なコンパスに見えるが、仲々艦の進路を誤またないのは感服の外ない。

夜は活動寫眞あり、「ほがらかに歩め」。空は一寸時化模様。ウネリ高し。

○二月二十五日 日曜日 快晴 (正午の艦の位置 N 15°2' E 148°27'°)

今日は、機械室、釜室、發電機室の見學。機械室でスクリエーのピストンの大きいのに驚いた。釜室の氣温40°C、此れでもまだ涼いとの事だつた。午後一時半より柔道仕合あり。

夜は今回の日食觀測につき各隊の行なつた仕事の報告講演あり。東京班は藤田理學士、京都班は私、米國班は Cohn 氏及び Johnson 氏、電波班は遊佐工

學士，磁氣班は東中理學士，水路部は秋吉中佐。

○二月二十六日 月曜日 快晴 (正午の艦の位置 N 18°45' E 147°10')

朝食の後，疲れが出たらしく，正午頃迄眠る。

午後三時半より，前甲板にて，練習生の，サンドレッド，火箭，投射銃の教練あり。

午後五時半より救助艇作業あり。溺者の代りに酒樽を海に投げて，ライフボートを下し，樽を取りに行く教練。艦が一時停船して，愉快に見物した。

今日は巡檢の隨行をゆるすとの事であつたが参加しなかつた。

夕食後より，艦の全員冬服に着換へた。併し私達はまだ暑くて夏服のまゝ。

○二月二十七日 火曜日 曇 (正午の艦の位置 N 22°12' E 145°45'.5)

正午頃，六分儀の練習あり，私達の中にも，練習に行つた人々があつた。晝食に兵食を食べさすと云ふので，上田，荒木兩先生等は食ひに行かれた由。

一日室の中で，雜誌等を読む。秋吉中佐の航海天文學と云ふ本を見た。色々な表があつて，天體觀測により船艦の位置を出すのに便利なものらしい。

夕方より少し時化模様。日没後，後甲板にて活動寫眞あり，<sup>1</sup>高野長英夢物語<sup>1</sup>

午後八時北回歸線通過。

○二月二十八日 水曜日 快晴 (正午の艦の位置 N 25°34' E 144°2'.5)

天氣晴朗なれど波高し，艦のピッチングが少し増す。風が冷い。上衣を冬服にする。

午後一時，時計を一時間遅らして正午にする。

午後二時頃より後甲板にて記念撮影あり。終つて，手旗信號，繩の結び方等の講話あり。向ひ風にて後甲板に煤煙甚だし。

夕方，戦闘教練あり，燈火管制をやる。

○三月一日 木曜日 晴 (正午の艦の位置 N 29°14' E 142°7'.5)

晝食時に艦長の招待を受ける。日本酒，葡萄酒の御馳走になつた。

一日中眠むくて寝て暮らす。天氣はよいがルクテ島以來島一つも見えず。併し今度の航海は氣持のいゝ航海だつた。

夜，士官諸氏と觀測隊員との茶話會あり。菓子やコゝヒは勿論，日本酒ま

で出て、夜の十二時頃迄歓談した。

本日、ロソツプ島及び軍艦中の諸費の計算請求あり。今日迄食つたり飲んだりした分を總べて支拂ふ。

○三月二日 曇後雨 (正午の艦の位置 N 32°49' E 140°25')

寒さ俄かに増し、皆冬服に着かへた。寒くて室の外へ出られず。愈々明朝横須賀入港の由、正午頃より、夫々上陸の準備にとりかゝる。

午後五時頃左舷に青島、八丈島、御藏島を見る。東京灣近し。

夕方より雨降り出す。夜は室にて最後の別れの乾杯。

○三月三日 土曜日 横須賀着 曇雪

午前六時起床、六時半朝食、外は一面の吹雪。寒い。

室にかへつて出て見るともう横須賀に、はいつて居た。時に午前八時。観測隊員の家族、知人、多数の出迎へをうける。

午前十一時より、杉山回漕店の手にて荷揚げ。寒い中を午後三時半迄かゝつた。午後4時ランチにて上陸、懐しの軍艦春日にお暇をする。五十日振りて内地の土を踏んだ。

京都隊は本日午前解散、五十日に互る日食観測日誌も同時にこれにて擱筆をする。

(以上)

### 本會南米支部氣象觀測報告 (勝浦)

	1933年 2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1934年 1月
最高温度	33°0	31.7	29.0	27.5	28.0	27.0	32.2	30.8	35.1	31.0	31.5	30.2
最低温度	20°5	16.8	11.0	13.0	1.5	9.0	9.5	14.2	14.8	14.6	18.0	18.9
平均温度	24°8	24.5	22.6	20.4	17.3	18.0	20.4	22.1	23.9	23.8	24.3	24.6
降雨日數	12日	15日	6	6	7	7	3	10	12	13	20	30
降雨量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	167 <sup>mm</sup>	196 <sup>mm</sup>
平均雲量	7.3	5.1	3.9	3.3	3.2	4.3	1.7	3.9	6.3	5.3	7.3	9.3
電光雷鳴日數	22日	19	12	11	3	2	3	11	17	13	19	27

○當地の天氣模様は昨年2月より今年1月迄の一ケ年分をお知らせ致します。

○観測は1日6回で正しく行つて居ります。雨量は12月以前不明です。

○雲量は昨年から今年にかけて平年より幾分多く、雨量はこれに反し少ない様です。

○黄道光や他の観測可能と思はれる日數は一ケ年を通じて150日以上は充分に行はれる様です。

○毎年12月頃より翌年の2月頃までは日本での所謂梅雨期でありまして比較的曇天続きであります。